

青丘文庫研究会月報

No.250 2011年2月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 在日朝鮮人運動史研究会関西部会(代表・飛田雄一)
 朝鮮近現代史研究会(代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として2000円/年をお願いします。

第277回朝鮮近現代史研究会その（2010.12.12）

布施辰治と植民地期朝鮮民衆 1920年代の弁護・支援活動を中心に

川口祥子



植民地期に朝鮮人の民族解放運動に連帯し人間的交流を持ちえた日本人の一人として布施辰治(1880~1953)をとりあげた。布施について辞典類17点を調査すると植民地・朝鮮人に関して触れていないものが4点あり、関東大震災下の活動については亀戸事件について8点が触れているが朝鮮人虐殺事件に関する行動について記したものはない。『宮城県百科事典』1982年には布施が宮城県出身にも関わらず彼の人物項目自体が存在しない。布施が朝鮮と関わった事項のうち日本植民地期のものが15項目見つかり、そのほとんどが1920年代の出来事である。

1923年最初の朝鮮訪問から戻った直後に関東大震災が起こり、布施は朝鮮人・中国人・日本人社会主義者・無政府主義者・労働運動指導者等の虐殺事件の真相究明と、焼け出された借家人の権利保護のために奮闘した。1923年12月28日の「遭難同胞追悼会」では「人間の死は弔うべきものであるが、殺されたものの靈はこれを弔う前に、まず殺したものを憎み、呪い、その責任を問わねばならない」と厳しく責任を追及した。また「鮮人騒ぎの調査」では官憲当局の発表を批判し、殺害の原因については、遠因となった流言蜚語を放ったものを突き止めることが最も肝心なのに、当局の発表は不徹底であると述べる。さらに「之れ恐らくは、変災直後の人心洩々たるに乗じて、案外組織的な鮮人暴動襲来と云ふ妄想敵国の流言蜚語を放ったものがあった正体の暴露を慮るるが為ではあるまいか」と述べ、布施らは当初から流言の出所は官憲であると考えていたと思われる。布施らによる真相追究を官憲は妨害し事実隠蔽を続けたが現在に至るまでその状況は変わっていない。このことを山田昭次は「民衆責任」と言う言葉で述べている。この語とは少し異なるが布施に関する辞典の記述(亀戸事件は記しても朝鮮人虐殺事件は記述しない)は姜徳相が指摘する「日本人研究者の関心度・研究水準の低さ」とつながりはしまいかと思われる。布施の生涯の事跡の中で朝鮮人虐殺時の行動は特筆されるべきものと思う。

1927年10月と12月、朝鮮共産党事件の弁護活動のために朝鮮を訪れている。9月12付『東亜日報』の社説「日本から来る弁護士諸君へ」では、治安維持法という共通の法によって裁かれるのであるから朝鮮において特に不利益にならぬように、また「国家の利益」という名のもとで行政官の圧力を受け重罰を受けぬように厳重に監視してもらいたいと日本から来る弁護士に強い期待を寄せている。

10月8日朝鮮に到着した布施は刑務所にて被告らの面会、裁判長への申し入れ、歓迎会、講演会等精力的行動しその言動は逐次新聞で詳細に報道された。そして権五ら被告五人が布施らを代理人として鐘路警察署高等係主任警部ら四人を暴行凌虐流職罪で告訴するに至る。

帰国後記した「問題の朝鮮について声明す 東京と京城の間(二)」によると布施は朝鮮共産党事件の真相を「総督政治の暴虐に対する一種の反抗戦」と捉え、被告たちを「総督政治の暴虐に反抗する朝鮮同胞を代表した第一線の闘士が敵の捕虜になっているやうなもの」と慷慨している。したがって弁護の使命は「反抗の捕虜となれる闘士の奪還を期するにある」とする。

東京に戻ると直ちに自由法曹団臨時総会を開き拷問警官事件に関する総会決議を行なった。10月には在日本朝鮮労働総同盟代表の金漢卿ら朝鮮人3人とともに朝鮮総督府東京出張所を訪れ、滞在中の政務総監湯浅倉平に面会して朝鮮共産党事件公判についての質問と抗議を行ない「官憲が拷問によって事件を捏造するというのは総督政治の根幹に触れる問題」であると追及している。

1928年2月13日の判決内容は予想以上に厳しいものであったが『朝鮮日報』社説「共産党事件結審を見て」(1月16日付)はこの公判の意義を次のように捉えている。すなわち弁護人たちが終始一貫して正義の為に抗争したことによって「政治的裏面」=警察行政の掣肘を受けている司法機関=総督政治の実態、が明らかになりそれを朝鮮民衆の意識に深く刻みつけたことにあったという。そしてこれは「今までなかったこと」であり、「今回の公判の影響は日が経つにつれて新しい記憶を加え長久に継続されることは疑いない」と記している。これは朝鮮民衆の中に総督政治に対する抵抗の心が広がって行くことを予想していると読み取れる。文中に布施辰治の名前は記されていないがこれまでの新聞報道から見て「結束して正義のために抗争した」28人の弁護人の中に彼が存在し彼が重要な役割を果したことは周知のことである。



2004年、韓国政府は布施辰治に対して建国勳章愛族章を追叙した。建国勳章は「大韓民国の建国への功労、国基を強固にする功績」に対して授与されるものであり、それは日本の植民地支配下において抵抗・独立運動を行ったということを意味する。その建国勳章が植民地支配を行った側の国の人間、日本人に授与されたのは布施辰治が初めてである。布施の事跡から、まさに受章に値する人物であることが納得できる。

布施の孫である大石進は著書『弁護士布施辰治』のあとがきで、2004年に韓国建国勳章を受賞したあたりから布施に関する関心が日本でもかすかに出てきたが「それまでは布施辰治は、日本においてほぼ忘れられた存在だった」と書いている。2010年5月にはドキュメンタリー映画「弁護士 布施辰治」も完成した。韓国での動きによって人々の関心が呼び起こされたということを、泉下の布施は喜んでいるのではないかと思う。

第277回朝鮮近現代史研究会その (2010.12.12)

ブラジル韓人コミュニティと冷戦 全 淑美

ブラジル韓人移民史を語るとき、国民国家を基本に考えると、確かに韓国移民史=大韓民国政府からの移民史ということになる。しかし、朝鮮民族の移民史と考えた場合、現在確認できている最初の朝鮮民族の移住は植民地期朝鮮の時代になる。

第二次世界大戦の戦前から日本人移民社会で個々に暮らしていた朝鮮人達(植民地期移民と略記)は、1956年、朝鮮戦争の元捕虜であった朝鮮人移民(56年移民と略記)と出会い、サンパウロに小さなコミュニティを形成した。元日本国籍、無国籍という背景であったため、朝鮮半島にあるどちらの政府からも認められない、いわばハンディを背負った朝鮮人同士の出会いであった。従って、そのコミュニティの役割

として、同胞に出会った喜びと癒しの機能を持っていた。

そして、1962年より本格的に移住（韓国期移民と略記）が始まった。最初の移民が到着して7ヶ月後に初の民族団体である僑民会が発足し、この団体は分離、融合を経て、今日のブラジル韓人会へとつながっている。しかしながら、韓国期移民の数が膨張するに従い、冷戦に起因するコミュニティ内に見えない壁が出現する。僑民会も、準備に奔走していた新移民に対し、56年移民を僑民会の組織につけるよう非公式に韓国政府から指示が出るなど、冷戦を背景として生まれていた。植民地期移民の中には韓国期移民から拒否されたり、反対に自らコミュニティを去っていく者もいた。朝鮮半島情勢に対する見解の相違が主な原因と考えられる。また「以北」出身が多数を占める56年移民は、韓国期移民から「思想的に灰色分子」と見なされた。

このような出来事から、発生したばかりのコミュニティは韓国期移民流入後、冷戦の影響を受けながら大多数を占める韓国期移民中心のコミュニティと変容した。多くの56年移民は、主に婚姻関係や信仰、就業を通じてコミュニティ内に吸収され、目立たない存在となっていました。

冷戦終結後、「最初の移民はだれか」を問う問題が浮上。56年移民に対して「祖国を捨てた人々」という評価が下り、コミュニティ内に見えないヘゲモニー争いが残った。その一方で、韓国期移民へ無償の救済行動を遂行した戦前移民に対しては「移民の先駆者」という表現を用いて賞賛している。国民国家という思想を超えて称えた証である。また、2007年、『南美東亜』（東亜日報社系列）に韓人コミュニティの形成を国民国家という枠組みではなく、民族という視点から移民史を再考する必要性を投げかける意見が出たことは注目される。またコミュニティの主産業は、確かに韓国期移民によって築かれたものであるが、戦前移民や56年移民が残した形跡はないと評される傾向にある。しかし、戦前移民は韓国期移民が定着する上で必要な食住や移動手段を支援し、56年移民は主に通訳や辞典作成という言語文化の面等で新しいコミュニティ建設を支えた。韓国期移民の導入に大きな役割を果たしたのも戦前移民であった。56年移民も初期の韓国期移民も同世代の人々で生存者も減少している現在、再度韓人コミュニティを見つめ直し、新しい視点で移民史を検討する時期ではないだろうか。

広告

むくげブックレット

信長正義「東学農民革命の遺跡地をたずねて」

A4、40頁、カラー、定価400円（送料80円）

希望者は、郵便振替<01120-5-46997 むくげの会>または80円切手6枚をむくげの会までお送りください。

<はじめに>より

2010年5月末に「東学農民革命」の遺跡地を訪ねることができた。私は神戸の「つぶて書房」より「全北日報」の東学農民革命特別取材チームが著した『東学農民革命100年』を翻訳する機会が与えられ、その本が2007年に同じ題名で出版された（写真）。この本の翻訳にあたって2001年に全州を中心にしていくつかの東学遺跡地を訪ねたことがある。しかしあれから10年が経とうとしていることと、2004年に韓国国会で「東学農民革命参加者等の名誉回復に関する特別法」が公布されたことによって、遺跡地が整備されたり、不明だった戦跡地が発見されたのではないかと思い、2010年の秋にはぜひ訪問したいと願っていた。ところがある偶然が重なり5月末に多くの遺跡地を回ることができた。

20数年前、株洲市で開かれた「反原発」運動の集会に、韓国から、たどたどしい日本語の若い女性が参加していた。韓国語を学んでいた私の妻はその女性と意気投合し、そこから付き合いが始まったのである。韓国を訪問したときには江華島に住んでいる彼女と出会い、またメールの交換をしていた。

今年早々に彼女から、いま婚約中の男性と秋に日本を訪問したいというメールが届いた。そこで私たち夫婦は、秋ではなく5月末ころに韓国訪問を決め、「全州付近と公州にかけての東学関係の遺跡地を二日間にわたってタクシーで回ってから、江華島を訪みたい」というメールを返した。すると彼女から5月29日に、全州出身の私たちは全州で結婚式を挙げるので、それに合わせて韓国に来てほしい。夫になる人が信長さんのしていることに感動したので、私たちの新婚旅行を兼ねてぜひ遺跡地を案内したいと言っているというのである。なんということだろうか。私たちこそ感動し、ぜひ結婚式に出たいし、遺跡地の案内もお願いしたいという返事をしたのである。そして私は早速案内してもらう遺跡地等の場所を手紙に書いて出した。

5月28日、私たちは閑空を出発して仁川空港に向かった。その後の旅行記を訪問順に記したい。



神戸学生青年センター・現代キリスト教セミナー

「日本で活躍した初期の朝鮮人女性伝道師」

講 師：聖和大学非常勤講師、在日大韓基督教会教育主事 吳 寿 恵（オ・スヘ）さん

戦前、植民地朝鮮から日本に留学した神学生は多く、朝鮮半島や日本で活発な伝道活動を行いました。その中には女性神学生がいて、彼女らのなかには卒業後も日本で活動をした伝道師もいます。吳さんは、今年、同志社大学神学部で「在日朝鮮基督教会の女性史研究」で博士号を取得されました。日本各地の神学校名簿等の調査から「朝鮮女性伝道師」の掘り起こしをされました。その論文から表記テーマでご講演をしていただきます。

日 時：2011年2月25日（金）午後6時30分

参加費：600円（学生300円）

主催・会場：(財)神戸学生青年センター TEL 078-851-2760

青丘文庫研究会のご案内

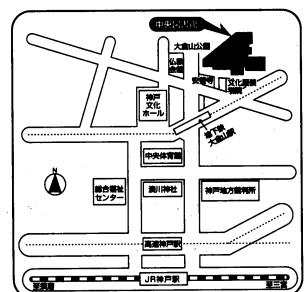
第324回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

2月13日（日）午後1時

「戦前期大阪における朝鮮人医療問題

-慈恵的救療と大阪朝鮮無産者診療所を中心として-」

塚崎昌之



第279回・朝鮮近現代史研究会

2月13日（日）午後3時

「朝鮮戦争と中国革命～国共内戦の展開を中心に」

李景珉

会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351

【今後の研究会の予定】

2011年3月13日（日）在日（未定）近現代史（未定）研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

3月号以降は、高正子、斎藤正樹、坂本悠一、砂上昌一、高野昭雄、全淑美、塚崎昌之。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

- ことのほか寒い今年の冬ですが、みなさまいかがお過ごしでしょうか。先日、鄭早苗さんを偲ぶ会に参加しました。辛い会でしたが、心暖まるいい会でした。
- 青丘文庫に韓国からの来客が増えています。嬉しいことです。（飛田雄一 hida@ksyc.jp）